

「私はソーシャルワーカー」

児童養護施設美谷学園

副園長 井上智寛

昭和50年4月に社会福祉法人児童養護施設美谷学園に採用され、今日に至っています。長い年数を振り返りますと、色々な事がありました。児童福祉の分野でのソーシャルワーカーが、いかに繊細で、壊れやすく、微妙な速度と巾で一進一退を繰り返しながらも、着実に年数が経過していく事を思い知らされたものです。

児童養護施設の児童指導員を拝命し主任指導員を経験し副施設長の役職になり、その間、家庭支援専門相談員を兼務しながら現場の職務に携わっています。児童指導員時代も児童の事、保護者の事等多くのケースを担当してきましたが、家庭支援専門相談員兼務を任命されてから、何か特別な思いで臨むようになったと思います。子ども相談センターの児童福祉司との協議や協力体制の強化、単独や同行等家庭訪問、保護者の付添支援等の回数の増加、中身の濃い状態が頻発したり、夕方から夜にかけての活動が全体的にめっきり多くなったように感じます。活動量や内容を時系列でもって記録していくなかで、児童の成長に伴い保護者の児童への関わりが複雑になってきている事が、時代と共に変化してきていると思います。保護者や児童の状態を見ても、先の見通しや現況をあまり理解できないケースが、かなり多くなってきていると感じます。家庭訪問に関して、アフターケア関連の活動が多くあり、就職先への対応や進学に関しての相談等も複雑化しています。

私のライフワークの一環で、日中美谷福祉協会の組織の設立や推進に加わり、中国の特殊教育学校の先生方を日本に招へいし、日本の児童福祉、障がい児（者）福祉の国の制度や体制の現状や各組織の対応状況の視察、施設での対象児（者）との交流を進めてきましたが、中国の特殊教育学校の先生方は、日本の障がい児（者）教育、処遇に特に興味をもたれ、来日を強く望んでおられるため、多くの先生方に日本での研修を実施していただきました。どの先生方も非常に熱心で、日中活動後のディスカッションも白熱したものであり、児童に対しての熱い思いが手に取るように伝わってきていました。国際交流と共に、教師、ソーシャルワーカーとしての態度や対応を中国の先生方より改めて学べたような思いがいたしました。

日本の児童福祉の現状や各組織の対応状況の視察、施設での対象児童との交流を進めてきた上で、日本の障がい者施設の先生方や協会の役員さん方と共に、中国の特殊教育学校（障がいを持つ児童の通う学校）の先生方に対して、在日の中国人で日本の大学の先生の要請もあり協力やコーディネイを得て、日本の大学の先生方（TEACCH、ABA、太田ステージのそれぞれの分野の著名な方々）のご厚意により授業形式で講演活動の経験があり、2010年度より2012年度の3か年をジャイカ事業を活用し、草の根事業の日中友好交流活動として中国・河北省の秦皇島特殊教育学校を会場として自閉症等発達障害児（者）の教育・生活・就労・福祉等全般の研修を開催してきました。

美谷学園での入所中の要保護児童が、特に学習遅滞児童や障がいを持つ児童が多いと言  
う事ではないと思いますが、日常生活の中での言葉から、わかりやすく理解できる言葉が  
けや、実際に触れ合いの中で進めていく事を心がける必要がある旨を把握してもらえよ  
うにした。幸い中国は漢字の国なので、ある意味、通訳を介しなくても案外意思疎通が  
出来るものだと感じていました。

社会福祉法人美谷会には、昭和 29 年より、児童養護施設美谷学園の開設から障がい児(者)  
生活支援施設、高齢者施設等 7 つの事業を展開している現状ですが、児童養護施設の入所  
児童の内訳で障がいをもった児童の入所が 20%前後あり、山間部にある施設の設置環境  
で、小規模校のクラスを施設の障がい児童が占めるといった現状があり、軽度の知的障  
がいや、広汎性発達障がいの子どもの養護対応が年々難しくなってきた背景があります。  
施設の担当職員が学校に赴き、授業についたり、パニック対応や、授業妨害とも受け止め  
られる児童を施設に連れ帰ったり、精神的な揺れ動きを校舎内で時間をかけ、別室で鎮め  
たりする対応が日常のようになり、まさに類は類を呼び、学級崩壊の様相を呈してきたこ  
とから、障がいのある子等への対応について、真剣に取り組む必要性があります。学校に  
おける、この子等の言動から、無理解とも取れる地域社会の意見は、子ども達の居場所  
にも関係してくると思われ、そうした中、障がいを持つ子ども達への対応で、「言葉」が大  
きく影響していると感じられる光景や結果を多く見てきました。

美谷学園では保育士実習や社会福祉士実習での実習生を、大学や短期大学より年間 60  
～70 人を受けています。実習生の受け入れ業務や指導を 2 名の職員で担当しています。  
事前オリエンテーションの実施や現場職員と実習生とのつながりや評価票の整備、発送等  
次代を担う職員育成に現場職員と協力しながら進めています。現状も今後も、児童養護  
施設の職員確保に困難が生じてきていることから、とりわけ実習生指導にはグループ担  
当者がそれぞれの勤務シフトに従って日常の実習実態やその日の反省会を通して理解し  
やすいように対応しています。児童の個別での対応で、関わりのしやすい児童と、関  
わりの難しい児童に対しての取組みには、それぞれの実習生により違いがあるが、  
対応の現状を見ながら、関わりの難しい児童への対応の仕方、取りかか  
りのきっかけの探し方やどのように進めていくかを指導するにつ  
け、日常的に職務で行っている児童や保護者への対応を例  
に出して説明すると、非常に分りやすく受け取ってもらえる事になります。

実習生には、児童養護施設の現状や今後の方向性を説明していく上で、児童の将来を  
どのように考え、一人の一番近くにいる大人として、どのように向き合っていくかを、  
丁寧に語りかけ分ってもらうために努力していく事が大切だと思っています。